を携帶したるものは、**テキコ**であつて、彼れは**ピレモン**と其奴隷**オネシモ**の事に就いて、奔走の勞を執つた人であるのでせう。(四〇七—九)

パウロは此書簡に於いて先づ**コロサイ**の信徒等の靈的狀態に就いて神に謝し、且つ更に彼等が知慧と聰明とに進まんことを願うのでありました。そして彼れは直ちに所謂基督論の說明に移り、或る點に於いては、羅馬書などよりは遙かに遠大なる思想を吐露して居るのであります。次いで彼れ自身の召命と敎會のための勞苦とに就いて述べ、以て一章を終つてをります。

二章は此書簡の主論と見らるべきものであります。僞りの敎師等の僞りの敎義に就いて警戒すべきを述べ、神の圓滿具足の德は悉く基督にありて貌をなせりと論じ、基督と共に死にたる彼等『世の小學より離れ』基督と偕に、神の中に藏されある生命を想ふべしと勸めをなして居るのであります。三章五節から四章六節までは實際上の奬勵でありまして、罪と肉慾とを戒め、聖き生活を進め、夫婦、親

子、主從の間の不義ならざらんことを望んで居るのであります。かくて個人の消息と挨拶と(四〇七—十八)『爾曹我れの繫縛を念へ』との心情を攄べて、此書簡を結んで居ります。

文體辭句のみならず、其敎義の稍々特異なるによりて、此書簡の正統は大に疑はれて居ります。其論ずる基督論は、之れより以前の書簡に比して甚だ進步して居りますことは、疑ひないのです。『神の充足る德は悉く形體をなして基督に住り』と言へるが如きは、餘程發達したる敎理に近づいて居る事を示し、亦此書に論ぜらるゝ異端說の如きも、實は保羅の時代よりは稍々後世のものであることを示して居る樣に見らるゝのであります。

併し私共の見る處では、單に之れだけの根據では、未だ此書簡の正統を疑ふものとしては、甚だ薄弱であるを免かれまいと思ふのです。故に更らに有力なる理由のあらざる限りは、私共は之れを保羅のものとして正確を信じようと思ふので

す。若しカイザリヤから贈つたものとすれば紀元五十七年から五十九年までゝあり、羅馬からとすれば――多分此方が本當であるでせう――紀元六十一年の作であらうと信ぜられます。

之れよりは一層正確を疑はれて居りますものは**以弗所書**でありまして、問題は遙かに困難であるのです。尤も此書簡と哥羅西書とは、若し後者が其正統を信ぜられ得べくば、此書簡も當然同樣に信ぜられ得べきものたる程に、甚だ酷似して居るのであります。然るに其酷似して居る處が、却つて問題の生ずる處となつて居るのです。哥羅西書九十五節の中、四十八節までは以弗所書に於いて見出さるゝのでありまして、前者の三分の一は文字のまゝで、後者に於いて見るを得るのです。**パウロ**は決して獨創に乏しい人では無いのです。彼れは何故に此兩書に於いてかくも同文を繰返へして居るのでありませう。

私共は此問題に入るに先だつて、本書の內容を少しく述べなくてはなりません。

卽ち常の如く挨拶を述べて（一章）後『**イエスキリスト**に由りて我儕を己れの子となさん』として、彼れを撰び給ひしを神に謝し、讀者が敎會の首なる基督を知るの知識に進まんことを祈つて居ります。二章に至りて讀者の過去と現在とに於ける靈的狀態を比較して、彼等の救は信仰によれる恩惠なることを言ひ、猶太人と異邦人とを分つ籬きの基督に依りて破られ、皆一つの靈にありて父に近づくを得ることを述べて居るのであります。三章に於いて**パウロ**の異邦人に對する使命を陳べて居りますが、玆にたゞ怪しむべきは、彼れが**エペソ**に三年留まり（徒廿〇卅）大に成功したりと錄されてありまするに（同じ十九〇十七―廿）今此書に於いては『爾曹若し爾曹の爲に神の我に賜ひし恩に就いて聞きしならば』（三〇二、那譯には此意は能く現はれて居らぬ樣です）と申して居りますのは、如何なる譯でありませうか。四章と五章とは例に由つて實際上の問題に對して忠告を試み、章に於て親子主從などの互ひの義務を說き、堅く信仰に立つべきことゝ、**パウロ**のために讀

者の祈らんことを求めて、擱筆いたして居るのであります。

此書簡が若し保羅のものであるならば、哥羅西書と同時に書いたものと見なくてはならぬのです。何となれば夫れが此兩書の酷似して居る理由を解する、唯一の根據であるからであります。然るに之れは表面の事でありまして、私共は深く綿密に調べて參りますると、以弗所書の用語と思想の範圍とは、確かに後世のものであることを私共に感ぜしむるのであります。『兩書を近く持つて來れば來る程、以弗所書の思想と文體とは違つたものであることを見出す』とは、**モフアツト**の言であります。實際此書簡の文章の様に、終りの無い悠長なものは、保羅の書簡中他に比類を求め難きものであります。亦此書簡には福音と律法の議論は無く、且つ基督に依れる和ぎは、神と人との間の事ではなくて、猶太人と異邦人との間の事になつて居るのです。夫れに先輩たる使徒等に對する彼れの爭の記憶が猶ほ新しくあるべき筈であるのに、神の家は『使徒の基の上に建らる』(二〇廿)と言

ひ、亦ユダヤ人と異邦人の同等であることは『聖き使徒等に示された』(三〇五、六)ことであると申して居りますが、果して然らば其使徒等が此問題に就いて爭つたと言ふのも不思議な譯でありますから、結局此等が保羅の筆になつたものとは想像し難き事となるのであります。正さしく使徒時代の烈しき不一致を和解せんと欲した傾向を示して居るのでありまして、確かに此書簡の後世のものであることを知るに足るべく、**パウロ**の作たるを否定するは止むを得ないことゝ思ふのです。『保羅の名を以て哥羅西書を公會的のものに爲した』のが以弗所書であるとは**モフアツト**の說でありますが、恐らくは眞を得たものであらうかとも思はれます。若し爾うならば著作の時は多分紀元九十年頃であつたらうと信ぜられます。

假りに著者の事は別として、此書簡の**エペソ**人に贈られたと言ふ事も、甚だ疑はしいのであります。既に述べておいた通り、此書の讀者等は**パウロ**に關して知る處が無いかの様に錄されてありますが、若し讀者の眞に**エペソ**人であるものな

らば、是は全く解し難い事であるのです。**エペソ**は保羅が永く滯在して、苦戰した處であるのです。從つて此書簡に個人的記事の全く無いと言ふのも、實に異例な事であるのです。**エペソ**には**パウロ**の友人が居らなかつたでありませうか。夫れにしても曩きに**エペソ**に於いて働きを共にしたる**テモテ**も**アリスタルコ**も、今現に羅馬に居るのに（徒十九〇廿九、哥前四〇十七）彼等に關しても何等言ふことなきは、**パウロ**としては珍らしきことであります。亦此書簡は二つの古抄本には『エペソ人に』と言ふ宛名は錄して無いのです。**マルシオン**は紀元百四十年に之れを引用して居りますが、之れを『ラオデキヤ人に』贈りしものとなして居ります。三四世紀頃の**オリゲン**や**バシル**などの記事にも、全然宛名のなきものとして取扱はれて居ります。依つて此書は小亞細亞の各地の教會に贈られたる回文であつたらうとの、說が由來學者の間に唱へられて居ります。併し恐らくは使徒等の次ぎの時代の說教集の類であつて、夫れにパウロの名を聯想せしむべく、書簡體の

ものに書き流したものであらうかと信ぜらるゝのであります。

腓立比書は確かに**パウロ**の筆に成りたるものでありまして、彼れが最後のものであらうと信ぜられます。紀元六十一年から六十二三年頃までの間の作と思はれます。詩の如く調高く、婦人の書の如き熱情に溢れたものであります。**ピリピ**の教會は、**パウロ**が第二次傳道旅行の際に設立したるものでありますが（徒十六〇十一—四十）特に**パウロ**との關係が親密な教會であつたのです。其間に苦き追憶の何物も無いのでありました。**パウロ**は彼等からのみ愛の愧物を受けたのでした。（四〇十五）現に此書簡の如きも、**エパプロデト**を通して與へられたる其好意に對してのものであつたのです。**エパプロデト**は病氣のために**ピリピ**に歸へる事が遲れたのでありましたが（二〇廿五—三十）其代りに此貴重なる書簡を携へ歸へり、與へられたる使命に無限の報を得て、後の世までに尊とき遺產となしたのでありました。

パウロは歡喜に充ちて彼れが審判も幽囚も『福音の進行く助けとなりしを』讀者に告ぐるのでありました。(一〇十二) 猜忌と分爭に因りて基督を宣ぶるもの、或は**パウロ**に反對するの心を以てするものもあるが、必竟宣ぶる處は基督なれば凡ては感謝であると申してをります (一〇十八) 彼れは間もなく**ピリピ**の人々に再會の期があるだらうとなして居りました(二〇廿四)併し同時に彼れは疾く世を逝りて基督と偕に居らんことを希望し、されど此世に留まること人の益なるべきかとも考へて居りました (一〇廿—廿四) 彼れは**ピリピ**の人々がすべて異心を去りて一にならんことを望み、基督の如く謙遜ならんことを勸むるのでありました (二章) 三章に至りては**ユダヤ**主義の人々に對する古き焰が再び燃えて居りますが、併し彼れは過去の苦き爭鬪を思ふとき、後に在るものを忘れ、基督にありて高きに上り行かんとの良き教訓を與ふるのでありました。亦基督の十字架に敵するものゝ今も多きを**ピリピ**人に警戒し (三〇十八) 彼等の堅く信仰に立つべきを

勸め、主に在りて喜ぶべしと誨して居るのであります。——陰欝なる獄中の生活をなせる人の言としも思へぬ程美しく、晴れ〳〵しき調子を以て此書を畢つて居るのであります。終りに臨んで眞實なること、敬ふべきこと、公義、清潔、愛すべきこと、善稱など、凡そ此如き德を念とすべしと申し、**ピリピ**の教會が彼れになしたる厚意を感謝して居ります。——かくて基督の偉大なる囚はれの使徒は、永久生けるもの國から消え失せ、基督と偕に神の中に藏さるゝ事となつたのであります。

彼れは此後免されて**ピリピ**人に歸へり行かんとの希望は、遂ひに失望に終つたかの樣に見えます。而して世を逝りて、彼れが愛し仕へたる主と偕ならんとの、切なる思慕は達せられたのであります。人の中にて保羅の如き勇ましき生涯、亦神に仕へて此如く美しき生涯は無かつたのであります。『我が生くるは基督』と彼れが申ましたが、實に其通りであつたのであります。

第十一章　牧會的書簡と一般的書簡

之れまで述べて參りました十書簡に加へて、猶ほ四つの書簡が保羅のものと稱せられて居ります。一つは長きもので希伯來書と稱せられ、他は短かく、提摩太前後書と、提多書とであります。併し此中の希伯來書は別に論ずることゝして、茲には引續き他の三書を研究することに致します。

之れを牧會的書簡と申しますのは、其書簡が教會の教師たるものに宛てたるものであり、且つ其論ずる處は教會上の事項に關するものが多いからであります。勿論當時流行したる虚僞の教訓に對する議論なども、相應に含まれては居るのであります。卽ち**提摩太前書**にありては、始めから『奇談と極りなき系圖』とに對する警戒が叫ばれ、**テモテ**自身は『健全なる教』(邦譯には『善言』とあります)――之れは此等の書簡に特有な語であります。――を保ち、亦教ふべきを命ぜられて

居ります。其他禮拜に關するもの、婦人の服從、監督、執事等の資格に付いて論ぜられて居ります。或る種の制慾主義を指して『惡魔の教』と言ひ、ヒドク非難せられてあります。**キリスト**、**イエス**の善き牧者としての**テモテ**の務めは親切に說かれ、寡婦、長老、奴隷に對する教訓を揭げ、終りに富者に對する戒めと、**テモテ**がノスチック主義の危險から避くべきことを勸めてあります。**後書**に至りては**テモテ**の『僞りなき信仰』を喜び、更らに福音を耻とせず。『眞言の模楷』を保つべきを勸めて居ります。此勸めの後ちに、保羅は其囚はれの中にありて、**アジア**にある信徒等の彼れに背きたるに拘らず、オネシポロの訪問に依りて慰められたる由を述べてをります。而して種々なる教義上の議論、誤謬を指摘し、亦訓誡を與へてをります。義しき生活のために迫害せらるゝ人々のために、**パウロ**は自身の受けたる迫害の經驗を語り、**テモテ**は『善き言』を宣傳すべしと命ぜられ、終りに個人に關する事柄と挨拶とを以て書簡を結んでをるのです。**提多書**は長老と監督とに關する規則と、僞りの教

師等に就いての戒めを掲げ『彼等の口をして箝がしむべし』と云ひ、**クレテ**人の道德に關して訓戒を與へてをります。**テトス**は老人、婦人、青年、奴隷などに對して『善き敎』を傳ふべきを命ぜられ、其他の勸めと挨拶とを以て終りを告げてをります。

此等以上に述べたる書簡が、現在あるが儘の形に於いて、保羅の著作であらうとは、甚だ辯護に難きを覺ゆるのであります。三書は共に同一の人の手に成つたものであらうとだけは信ずることが出來ますが、併し夫れは保羅では無かつたと信ぜらるゝのであります。提摩太前書と提多書との示す處によれば、若し之れが保羅であつたとすれば、たしかに自由の身であつたと見なくてはならぬのであります。果して然らば彼れは羅馬にありて一度びは放免せられ、傳道旅行にも出でたものと見なくてはならぬのであります。（提前一〇三、多一〇五、三〇十二參照）

亦提摩太後書に由れば、彼れは**トロアス**、**ミレトス**、また**エペソ**に往きたる後ちに捕はれの身となつた樣に錄されてあります。（之れを保羅が第二回の入獄と解する人があります）併し此放免、旅行、第二回の人獄と云ふ樣な事は、正確なる史實の徵すべきものがないのみならず、私共としては全然信じ難き事であるのです。故に若し私共の斯く信ずることが誤つて居らぬとすれば、當然此等の書簡は正確なものではないとの結論に達する譯であるのです。

以上の難問があるのみならず、之れを保羅の作と信ずるに種々の困難があるのであります。其用語、文體、思想ともに、總て保羅のものらしく見えないのであります。三書を通じて全體十三章の中、百卅三よりは少なからざる、他の正確なる保羅の書簡には見出すを得ない語があるのですが、夫れは先づ偖ておき、神の父なること、和らぎ、基督と信者の一となること、律法より自由になること、罪より引き回へさるゝことなど、此如き明白に保羅のものとして知られて居る敎義は、たゞの一つだも見出すことが出來ないのであります。之れに反して此等の書簡に表はれて居る敎會主義、敎會制度『信仰』に正敎的（オルソドクス）意義の含まれて居ること、

『善言』『善言の模楷』など言ふ獨特の語があり、やゝ形をなせる信仰ヶ條とも見らるべきものゝ現はれて居ること（提前三〇十六參照）異端の進歩、提前五〇十八に路十〇七を引用して、夫れを『聖書』と稱して居ること――此等は總て使徒保羅の時代には見ることを得ざるものであつて、遙か後世のものたる現象を示して居るのであります。亦保羅が此等二人の親友に書を贈くるに當つて、今更らゝしく自らを『キリスト、イエスの僕』など言ふ形式上の稱呼を以て呼び、或は福音は自身に託せられたものであると言ふ樣な事を（提前一〇十一、二〇七、多一〇三參照）殊に力說する必要があつたのでありませうか。亦紀元五十二年以來保羅に伴つて居つたテモテが、當時『青年』としての慾望を警戒されなければならず（提後二〇廿二）亦世の人々も彼れを『青年』として輕蔑すると言ふ樣な事があり得べきことであつたでありませうか。（提前四〇十二）かくては青年と言ふ年齡は全く不可解なことになりはしますまいか。亦現にクレテに居住して居るテトスに贈く

る書簡に、クレテ人の特質を告げ知らすと言ふのもおかしく、或は自己が間接に知つたに過ぎない僞りの敎師の事などを、現に其地の人々に知らすると言ふ樣なことも（一〇十―十六）至つて解し難い事であるのです。

併乍提後一〇二―五、十五―十八、四〇六―廿二等の如きは、到底保羅ならではと思はるゝものであり、亦多一〇四、三〇十二―十五なども其中に入るべきものでありませう。此等は蓋し眞實保羅のものであるのでせう。夫れが此等の書簡を書いた人の手許にあつて、斯くは混入して居るのであらうと思ひます。要するに牧會書簡は他の名を假りた作でありまして、二世紀の初め頃に出來たものであらうと信ぜられます。かく信ずる私共は此等の書簡に依りて初代の敎會が、漸く公敎會に移り行く過渡の形勢を知るを得るのでありまして、矢張り極めて貴重なる文書であると思つて居ります。

雅各、彼得、猶太、約翰章の名稱を有する七書簡を、普通『一般的』若しく

は『公會的書簡』と稱して居ります。卽ち一般に解釋せらるゝ處に由れば、此等の書簡は明に指定されたる敎會若しくは個人と言ふものがあるのでは無く、たゞ基督敎國の一般を讀者と見たものであると言ふ處から、附せられた名稱であるのです。さりながら嚴密に此解釋の中に包含さるべきものとしては、約翰第一書、彼得後書、及び猶太書のみでありませう。雅各書は散されたる十二種族、彼得前書は小亞細亞の各地に散在せる選ばれたるものに、約翰第二書は『選を蒙れる婦人』に、而して第三書は『ガヨス』と言ふ人に贈られたものであるのです。私共は以下に少しく研究いたして見ませう。

雅各書は傳說に據れば、主の兄弟**ヤコブ**の作だと申されます。併し實際は此人に相應はしい何物をも此書に見出されず、亦**エルサレム**敎會の柱石であり首領であつたと言ふ人の書いたものとして、見るに足るべき何物も無いのであります。たゞ此書をして**ヤコブ**の書と思はしめたのは、此書を通じて**ユダヤ**主義的傾向が

漲ぎつて居り、同時に二〇十四—廿六の如き反保羅的な所論が存するためであります。けれども主の兄弟**ヤコブ**が單に『神および主イエス、キリストの僕』（一〇一）と申して居るのも訝かしく、亦一言**イエス**の人格と敎訓との事に及ばず、而して此書の文學が非常に壯麗なもので、そして古典的希臘語の素養淺からぬを偲ばしむるなど、何れも彼のものとしては受取り難きふしゝであります。

此書簡には基督敎の要素が極めて乏しいのです。**イエス**の**メシヤ**たること、復活のことなどに就いては何をも語らず、却つて著しく預言者や智慧文學の風趣を帶びて居るのであります。卽ち此書は基督敎徒の讀者のために書かれたる、猶太敎の敎科書であらうとの說さへ、唱へられて居るのであります。併し夫れとしては如何はしく思はるゝ點が多いのであります。

尙ほ他の問題は、之れ果して眞に書簡であるのでせうか。或は書簡體に蒐錄されたる說敎の類であつたのではないでせうか。私共として後者に加擔したく思ふ

のであります。私共は此書簡を讀んで、著者と讀者との個人的關係を發見せず、其宛名の如きも實は宛名にはなつて居らぬ樣に思ふのであります。何となれば『各地に散りおる十二の支派』とあるのですが、假りに之れを**ユダヤ**派の**クリスチヤン**と解して見ても、當時の世界の殆んど到る處に散在して居つた人々の總てを意味したものとは信じ難いのであります。而して亦此書の立案の具合は、餘程敎養ある讀者を目當てに或る暗示を供しようと言ふ工夫に成つたもので、文字其儘の讀物では無い樣に見えます。

此書の內容は至つて變化が多いので、之れを簡明に撮要することは六ヶしいのであります。大體に於いて稍々寒風の枯木を吹くが如き道德の書でありまして、古への希伯來の預言者等の夫れに似た處の多いものであります。『全體一百〇八節の中五十四までは命令詞であつて、夫れが深き同情を含んだ文と雜つて居るけれども、賞讃の辭に至りては只の一句も用ゐてはない』と言ふのが**モフアツト**の言で

あります。富と快樂とに對して此書は、**ユダヤ**的基督敎を特色とせるのエビオンの徒の態度を示し、宗敎を律法と見たる處は（二〇八—十三）全く**ユダヤ**敎を憶はしむるものであります。たゞ一ヶ處のみ基督敎的の敎理を述べて居りますが、夫れは保羅の行爲によらず信仰に依りて義とせらるゝとの敎義に對する、挑戰の態度とも見らるゝのであります。（二〇十四—廿六）保羅の唱ふる信仰は勿論消極的な敎理の承認では無かつたのですが、併し行爲を拒絕する處は動もすると種々なる誤解を招き易かつたのです。而して雅各は卽ち保羅の說を誤り傳へたものを、專ら根據としたのではあるまいかと思はるゝのであります。夫れは彼れが保羅の好んで使用した**アブラハム**の比喩を取つて（羅四〇、加三〇參照）反對論をなして居るに見て察し得らるゝと思ふのです。此點**ヤコブ**と**パウロ**の敎理の相異は僅かのものであると言ふ昔からの說は、當を得て居らないものと私共は見るのであります。**ヤコブ**は知らずして、**パウロ**の反對に出でたものでは無かつたと思ふの

です。

此書は未だ進歩せざる基督教を示して居る故に、極めて早き時代の著述であらうと申されて居りますが、實は全く爾うは思へないのです。私共は二世紀初期の產物たる『十二使徒の教訓』と稱する書を有して居りますが、其書の論旨が之と同じものであるのを見れば（基督に關する說は少くて行爲の原理を多く主張せる）此雅各書も亦恐らく紀元百廿五年頃の說教であつて、其世紀の終り頃に漸く書簡の體に爲られたるものであらうと思ふのです。**ハルナツク**なぞの信ずる處も、此邊である樣に見えます。

彼得前書は小亞細亞の北部地方にありて、信仰のために苦勞せる信者たちに贈つたものだと申されてあります。著者は彼等に、其試練は救を得るの保證であれば、歡をもて忍ばなくてはならぬと告げて居ります。（一〇一—十二）此望みを抱いて『僞りなき愛を以て兄弟を愛し』長敬と聖潔とを保ちて、忍耐しなくてはな

らぬ。（一〇十三—廿五）續いて種々なる倫理上の教訓が記されてあります。（二〇一—三〇十七）讀者は基督の苦難を心にとめて、同じ心を以て身を固めなくてはならぬ。（三〇十八—四〇一）異邦人の罪に歩まず、彼等互ひに愛さなくてはならぬ。（四〇二—十一）讀者は更らに大なる苦難に對して警戒せられ、希望と信任とを以て勇ましくなくてはならぬ。（四〇十二—十九）教會の長老は忠實に務めをなし、若き會員は長老に從はなくてはならぬ。（五〇一—五）彼等は皆謹愼と覺醒とに堅く立つべく、最後に**バビロン**（ロマ？）の教會からの問安等を以て、此書簡を終つて居りますが、此書も亦**クリスチヤン**が敬神の念を表はした、尊とき眞珠の一と見るべきものでありませう。

此書簡は實際**ペテロ**のものと見ることが出來ませうか。此疑問に多くの困難がこもつて居ります。第一此書の希臘語は非常に高尙なもので、文章も亦凡ならざるものでありまして『無學の小民』（徒四〇十三）なる**ガリラヤ**の漁夫の筆とは受

取り難いとの說があります。且亦**ペテロ**の時代の迫害と言へば、何れは紀元六十四年の夫れと見なくてはならぬのでありますが、併し此書中の記事から推したのでは、ドーモ夫れらしくは無く、モット後世の、そしてモット廣く擴がつたものであつた樣に見えるのであります。恐らくは**ドミシヤン**帝の時か（八十一年から九十六年）若しくは**トラヤン**帝の時（九十八から百十七年）の時の事であつたらうかと思はれるのであります。夫れに此書簡の記者は羅馬書を知つて居つたに違ひなく、（加拉太書はドーでしたらう）其書の思想と言語をさへも使用して居るのであります。そして**ペテロ**の書いたものとしては、福音の中心眞理に就いて何等の語なく、神の子、神の國、人の子、悔改、永生などに就いて何の言ふ處なきは、實に不思議な事であります。亦若し**バビロン**が默示錄にあるが如く**ロマ**を意味するものであつたとすれば、保羅の建てたる敎會に此書を贈るに當つて、保羅の生死に關して何等の消息をも記さないと言ふことがあるべきでせうか。

私共の此意見に反對するものは、文體が**ペテロ**らしくないと言ふことに對して、五章十二章を取つて、此書の實際の執筆者が**シルワノ**であつたがためだと申します。亦羅馬書に據る處ある故は、**ペテロ**が羅馬に來た時に、**パウロ**の書簡が保存せられてあつたのを見たであらう。そして彼れの受け入れ易き心は、其內容に接近したゞけ同化せらるゝ處があつたのであらうと申します。次ぎに迫害の日附けの事に關しては、**ネロ**の迫害は直接**ロマ**に限られたけれども、其結果は廣く波動を及ぼし、殆んど**ロマ**帝國の全體に迫害の慘禍を見たのであつたと申します。而して基督の生涯と敎訓に關するものゝ少なきは、此書簡の性質が敎ゆるにあるでなくして慰籍するにあつたからであると申します。最後に**ペテロ**が**パウロ**の事を語らざりしは格別深き理由も無かつたでありませう。世には有り得べからざることが、絕えず有るものであるからと申すのであります。

私共はたゞ讀者の判斷に一任するのみであります。讀者は自ら判じて、其善き

ものを執らなくてはならぬのであります。併し私共としては、全體に於いて以上の反對論の甚だ薄弱なものであるを感ぜざるを得ないのであります。夫れで此書簡は多分**ペテロ**の名に依りて**シルワノ**の書いたもので、**ドミシヤン**帝の迫害の時に（紀元九十二年から九十六年）小亞細亞の**クリスチヤン**を慰問するために贈つたものであります。かく信ずるに多少の困難はありますけれども、他に有力な説を見出さゞる限り、先づ私共は此邊で滿足するの外は無いことゝ思ひます。

彼得後書と猶太書とは、別々に論じ難き程、能く似たものであるのです。私共は先づ二つの中、短かき猶太書の方から論じなければなりますまい。彼得後書の記者は大部分、此書に負ふ處がある樣に見ゆるからであります。

猶太書は簡短ながらも强き辯論を以て、或る僞りの教師に反駁を加へて居ります。信仰を語る此著者の態度は『極めてドグマチックで、極めてオルソドックスで、そして極めて熱切なものだ』と稱せられて居ります。亦其調子は『四世紀頃

の監督の夫れだ』と申されてをります。併しオルソドックに對する彼れの熱心と共に、私共は彼れが曲外聖書の『エノクの書』を承認し（十四節）亦**ユダヤ**人の寓話たる、**モウセ**の肉體に關する**ミカエル**と惡魔との爭論を揭げて居るのを（九節）見るのであります。而して使徒等を以て既に過去のものとなし（十七節）亦『一度聖徒等に總て傳へられし信仰』（三節）とあるのを見ますれば、何れ此書簡の後世のものであるのを示して居ると思ふのです。亦此書に錄さるゝ異端なるものは、一世紀よりは後の時代のものであることは、極めて明白な事であるのです。さりとて私共は此書の著者と日附けとを定むべき、何等確たる手段を持つて居らないのであります。此著者を主の兄弟（卽ちヤコブの兄弟）の**ユダ**であると斷定することも、甚だ根據の無い說だと思ふのです。**ハルナツク**の想像せる如く、恐らくは二世紀初頃の或る**ユダ**と言ふ人の作であつたでありませう。其『ヤコブの兄弟』と言ふ句は、後世此書を重からしめん目的のために挿入されたものであるでせう。

彼得後書は猶太書の思想、結構を殆んど其儘に襲用したものかと思はれのです就中第二章の如きは、全く猶太書の燒き直しとしか見る事が出來ぬのであります。之れを仔細に點檢しますれば、猶太書は元であつて、彼得後書は夫れの適用であることは、疑ひなき事と思はるゝのです。猶太書が彼得後書から生れたものではなくて、彼得後書が猶太書を布衍したものであることは、見易きことであります。之れに依つて彼得後書の正確は、支持難きものとなるです。猶太書さへも第二世紀のものと見なければならぬからであります。若し爾うでなければ、私共ペテロを以て、ペラギヤスの主義に感化せられたものと見なくてはならず、亦彼れは他人の說を自分のものゝ中に取り入れたとの非難を免れることが出來ぬものとなるのです。

立ち歸へつて私共は此書の內容を見ますると、一章と三章とに於いて、著者は其名を冒せる使徒と自分との一致を全うせんと欲して、苦心して居る處を見るのです。卽ち挨拶と勸告（一〇一—十一）の後に、彼れは彼れの（卽ちペテロの）死に關する基督の預言を語り（一〇十四）彼れの死後にも讀者等が『此等の事』を憶起さんために勤勞する旨を語つて居りますが（一〇十五）實は之れを以てペテロが馬可福音書の源であるとの傳說と、暗合せしめんとの企であるらしく見えるのです。自らを變貌の實見者となし（一〇十六—十八）前きの書簡を書いた事情を述べて居ります（三〇一）三章に於いては基督の再來に關する信仰の、衰退したることを云ひ、かゝる懷疑的なる戲謔者の出で來ることは、既に語られたる處にして、且つ末日の象とも見るべきものであることを述べてをります。主の日の來るの遲きは、神の恩籠と深き聖旨に由るものであるとは、パウロも同意せる處であつたと言ひ、更らに勸告を與へて此書を終つてをります。

此如く此著者自身は、自らをシモン、ペテロと信ぜしめんと欲して、相當に努力して居り、而して猶太書の模倣と見らるゝ二章を除くとするも、此書のペテロの

ものであるとの説は、到底信じ難きものであるのです。此書を書いた人は、彼得前書を書いた人と同一で無いことは、文體と、用語と、調子との上に、充分表はれて居るのであります。著者の言ふが如き基督の再來に關する不信仰の如きは、決して使徒等の存命中には無かつたものであるのです。寧ろ二世紀に至つて、漸く見らるゝものであるのです。特に三章四節の思想の如きに於いて、最も然りとするのであります。眞にペテロなりせば、『爾曹の使徒等』(三〇二) と言ひ、亦彼等を以て、權威ある團體と見做し、亦主の命令を依托せられたるものと見る樣なことは言はなかつたでありませう。況んや眞にペテロであるならば、本書に言ふが如き、パウロの書簡に對する批評は無かるべく、亦之れを『他の聖書』と同一に見る樣なことは無かつたらうと思ふのです。(三〇十五、十六) 此如き處は確かに第二世紀の水準標を示して居るものであるとは、モフアットの所説であります。結局彼得後書は之れを以て使徒の書と認めしめんと、人の企てたる、所謂擬聖書

の部類におくべきものであると、私共は信ずるのであります。其正確の點から言へば、典外聖書の『ペテロの福音書』と稱するものと甲乙なきものと申して善からうと思ふのです。ペテロの福音書は使徒の名を冒して成功しなかつた著書であるのです。彼得後書は新約聖書中最も後世のものであつて、紀元百五十年頃のものであるとは、多數の學者の一致する意見であります。併し其後世のものであると言ふことも、亦擬聖書であると言うことも、此書の靈的價値に影響を與うるものでない事は、言ふを要しない事であります。亦かゝる業をなしたと言ふことも、古代の標準から申しますれば、多く咎むべき程の事でもなく、自分の説を夫れと同じ説の有名なる人を假りて、發表すると言ふことは、澤山あつたことであるのであります。

私共は今より約翰の三書簡に移つて、此章の終りと致したいと思ふのです。本とは此等は全然無名の著であるのですが、第四福音書に似た處があると言ふ點か

らして、之れを**ゼベダイ**の子**ヨハネ**の作であると稱せられて居るのであります。

約翰第一書はたしかに書簡では無いのです。形の上から申しましても、宛名だも無いのであります。然らば何であるかと申しますれば、之は或る異端に對して警戒されたる說教の筆記、若しくは誡めの文章であるのです。恐らくは初は本當の說教であつたのでせうが、後に回文體のものに作り變へられ、『われ言ふ』を『われ書く』に改めたものと思ふのです。(二〇十二—十四參照) 著者の主とせる題目は、信徒と神及び基督との交通、乃至は同心となると言ふことであります。(一〇三) 併し此交通は罪を拒み (一〇八) 亦兄弟の愛を缺ける (二〇九) ものとは兩立し難きものであります。而已ならず其他に僞りの敎師があつて、此交通を妨ぐる樣な誤れる敎を爲すものがある。彼等は歷史上の**イエス**が基督なることを拒み (二〇廿二) 耶蘇基督が肉體を以て來れりと云ふことを承認しないのであります。(四〇二) 著者は卽ち此等に反對するのを務めとなしたのであります。彼れは罪を

避け愛を行ふを以て神の子供の眞の表徵であると論じ (三〇)『その靈神より出るや否を試むべし』(四〇一—六) と言ひ、人間互ひの繫ぎとして基督に現はれし神の愛を保つべしと論じてをります (四〇七—廿一) 勝利と生命の條件として、基督に於ける愛と基督と一になることゝを數へて居ります。(五〇一—十二) 終りに至つて此書の敎訓を撮要し、偶像に對する警告を以て結んで居ります (五〇十三—廿一)

著者が非難する僞りの敎へは、二重の危險を含んでをつたのです。卽ち**ノスチツク**の徒は、基督の肉體的顯現を拒み、彼れの眞の人性を破壞し、彼れが死を單に幻覺であつたとなし、必然基督から救ひの能力を奪ひ去らうと致すのであります。同時に彼等の異端說は、人が眞に光りと靈とに導かるゝ時は、罪を犯すことが不可能な狀態に達するもので、かゝる人の爲せる行爲は實際上罪と稱すべきものでは無いと言ふ樣な、危險な主張に行く傾向を以て居つたのであります。故に

著者に取つては(一) **イエス、キリスト**の歴史的性質、(二) 信仰は道德を伴ふものであること等を主張しなくてはならぬのでありました。此第二の點に於いて此書は、雅各書と同様に力説いたしてをります。

此書の著者と第四福音書の著者とは同一の人であらうかに就いては、學者の說は區々であります。寧ろ肯定の方に對しては、一致を見るべき望は無い様であります。表面的に見ますれば、文體も用語も著しく似た處があります。併し約翰の文體は元來甚だ模し易いものであることも事實であり、同時に福音書と書簡とが似た處もありますが、異つた處の多いのも事實であるのです。そして亦此如き思想と教理を懷抱せる、所謂約翰流と稱せらるゝ一團の徒が、かの時代にはあつたのでありまして、此書簡の著者の如きも、或は其徒の一人であつたであらうと思はれるのです。第四福音書の終りの章の如きも、文體は確かに約翰流でありますけれども、近世の評家は一般に之れを他人の手に成りたる附錄であると見做して

ります。そして其人こそ、此書簡の著者と同人であらうと論ぜられて居ります。併し夫れは專門家のみの發言し得る問題に屬するもので、而かも專門家の說は萬人の說とも言ひ得ぬ場合の多いものであります。寧ろ私共の思ふ處では、一見して一致を示す點の非常に有力なものである時には、先づ夫れを同じものと見做すのが穩當な順序であらうと信ずるのです。卽ち私共は哥羅西書を保羅のものと見ると同一の論法に依りて、此書簡をも第四福音書の著者と同一のものと認めようと致すのであります。たゞ其何れが先きであつたかの問題は、到底決定し得べからざるものであります。多分は同じ時代のものであるのでせう。從つて福音書と同じく此書簡を、約そ紀元百十五年頃のものと見るのでありまして、此日附けから見て、著者は無論**ゼベダイ**の子の**ヨハネ**では無いのであります。

第一書とは異つて**第二第三の兩書**は、純然たる書簡であります。前者は『選ばれたるクリアと其子等』と稱する無名の敎會に贈つたものであり、後者は『ガヨ

ス』と言ふ個人に宛てたものであります。著者は自らを『長老』と稱するのみで其名を言はず、恐らくは讀者には夫れだけで明白であつたのでありませう。而して此『長老』は多分、所謂長老**ヨハネ**であつたのでは無いでせうか。彼れの事に就いては**ヒエラポリス**の**パピアス**が、其書の中に記して居りますが、相當見識を具へたる人物であつたと見えます。勿論使徒と**ヨハネ**は別人であります。此兩書とも至極簡短なもので、親しく接する時までの補足として、たゞ之れだけのものを書き贈つたものでせう。第二書にては第一書に言はれてあるものと同一の異說に對して、警戒されて居るのであります。彼等は人を惑はすものであつて、基督の肉體を以て生れ給へるを否むものであつたのです。第三書は**ガヨス**の眞理に忠なると、旅行より來れる說教者を寬待せるとを賞讃して居るのであります。其說教者の中には、十二節に記さるゝ、**デメテリヲ**は一人であつたらうと思はれます。書中に**デヲテレベス**を難じたる、强き文言があります。亦此書中『教會』とありますのは、第二書を贈つた夫れであつたかどうかは判明し難きものであります。

此兩書とも確實な文書であることは、疑ひはないのです。第一書と同一の著者であつたと云ふことも、若し疑問があつたとしても、夫は僅かなものであるでせう。兩書ともに同時代のものであり、而して其時代は二世紀の初め頃であつたらうと思はれます。

ヨハネの書き物を掩ふて居るヴェールを、全く取り去ることは容易でありません。**パウロ**の書き物は、夫れに强烈なる人格の閃めきがあつて、殆んど各頁ごとに遺憾なく現はして居りますが、併し**ヨハネ**の書き物に於いては、私共はたゞ一の聲を聞くのみであります。併し其聲は心靈の奥深き實驗と幻覺とから來れるものでありまして、私共に取つては實に尊ときものであるのです。著者は外部の事實に拘はること尠なく――歷史的**イエス**のことは別でありますが――基督に於いて、世にも優れたる眞理の啓示を見たのでありました。『神は愛なり、愛に居るも

のは神に在り、神また彼れに居る』との之れ實に宗教の極意でありまして、永久消ゆることなき眞理であるのでせう。

第十二章　希伯來書と默示錄

此二つの書を論じたいと思ふのですが、此等は固より全く性質の異つた記錄であります。然るにたゞ一つ同じ事があるのです。夫れは何れも新約聖書の他のものから、全くかけ離れたものであると言ふ之れであります。希伯來書は新約聖書の中にあつて、孤獨な而かも印象强き文學であります。他のものに比して其思想は餘程獨創的で、思辨の力も可成り大膽なものであります。默示錄は新約聖書中に殘れる唯一の未來記文學の標本であります。未來記文學は、末期の猶太敎と初期の基督敎の思想の上に、異常な感化力を及ぼしたものであるのです。

一

希伯來書は改正英譯でさへも今猶ほ、使徒保羅のものと稱して居るものであります。然るに此書自らにはさる要求を有つて居らず、全然無記名な作であります。

第二世紀の終り頃に存したる**ムラトリー**聖典の中には、此書は入つて居りません亦此時代の**イレニウス**は、此書を引用して居らぬのであります。彼れは之れを保羅のものと見なかつたからであります。三世紀の初め**テルトリアン**は之れを引用して居りますが、著者は**バルナバ**なりとして居ります。夫れよりは一世紀遲れて**オリゲン**は、其內容を保羅たるに相應はしきものと申しましたが、併し何人が眞の著者であるかは神のみ知り給ふと申して居りました。西方敎會では、**ジエローム**、**アウガスチン**等の之れを確實なものと承認したる四世紀末葉までは、全く經典の中から省いて居りました。**エラスムス**、**ルウテル**等は、之れを保羅の作とは認めなかつたです。**ルウテル**は之れを**アポロ**の作と申して居りました。今日では之れを保羅の作として熱心に辯護する人は、餘りありますまいと思ひます。彼れのものとなすべき根據は、殆ど無いのであります。

私共は此問題に入るに先だつて、少しく內容を語つておきたいと思ひます。拶挨

も緒言もなくて、たゞちに昔預言者等に由りて神の給ひし天啓と、近く其子に由りて與へられたる尊きものとを比較して居ります。彼れは『神の榮の光輝、その質の眞像』であるとあります。(一〇三)亦彼れの位は天使よりも高きものであります。たゞ此世に在りし間は、暫らく彼等よりは『少しく遜』つて居つたのです。(一〇四—二〇十八)同じく**イエス**は『我儕が信ずる處の使徒たる祭司長』とせられて、**モウセ**よりも高きものと言はれ、彼れを信ずるものは、彼等のために備へられたる平安に入ることを得ると申してあります(三〇一—四〇十四)『我儕の祭司長たるイエス』と言ふのが、本書の中心思想の一であつて、四章十四節から十章十八節に渉つて、諄々として論ぜられて居るものであります。卽ち此基督の職務は、舊約の祭司長の夫れと比較せられてあるのであります。(四〇十四—七〇廿八)其犧牲の死は、レビ族の祭司等の職務と對比されてあります。(八〇一—十〇十八)著者の闡明せんと努むる事は『**ユダヤ**敎に於て神の與へし

天啓は天使を通じて與へられたもので、**モウセ**により定められ、**アロン**の末の祭司等によりて永久的に堅うせられたるものであるが、**イエス**は彼等すべてに勝りたるもので、別けて前二者のものを具象化したるものである』と言ふ事にあつたのです。基督は『余は窮りなくメルキゼデクの班の如き祭司たり』と言へる仰せを受けて、神より其職務を授けられたるものであります。(五〇六) 故に彼れは**アロン**の末の祭司職を斥けて、彼れに從ふ者の永久の救の源となつたのであります。(五〇九) 彼れに比すれば『天に於て大なる威光あるものの位の右に坐せる』(八〇一) (祭司長も亦其他の祭司等も皆『天にある者の狀と影』とでありますが、基督は『愈れる約束に基きて立られたる契約の中保』であつたのです。(八〇五、六) **レビ**の祭司と異りて基督は『羊犢の血を用ゐず己が血をもて』人の救を全うせられ (九〇十二) (其犧牲は『屢々献ぐる』の要なく『永遠に全成』せらるゝものであつたのです。(十〇十—十八)

十章十九節から十三章廿五節までの此書の殘部は、教理的に肝要なものも少しはありますが、主として勸告の類であります。信者等は信仰に滿ちたる眞の心を以て、神に近づかなくてはならぬ。何となれば大なる日が近づきつゝあり、神の子を虐げたる人々のために、重き刑罰が待ちつゝあるからであります (十〇十九—卅一) 亦信者は己が靈の救のために、信仰を堅くしなくてはならぬ。『望む處を疑はず未だ見ざる處を憑據とする』信仰の勇者の實例は、十一章を飾つて居るものであります。證者の大なる雲に取り圍まれたれば、基督の忍び給へる如く、信者は苦難を忍ばなくてはならぬ。神の試練なる苦難を忍びて、彼等は『其聖潔に與』かることが出來るのであります。(十二〇一—十三) 進んで『萬殊なる教と異なる教』とを愼むべきこと、著者のためにも祈るべきこと、最後に短かき祈禱と挨拶と祝福とを以て、此書の終りをなして居ります。

却說私共は此書の保羅から出でたものであるを、信ずることが出來ぬのです。

種々なる證據を集めれば集める程、此信念を堅くするのみであります。保羅の文體は作法に缺けたる處多く、希臘文の極めて不完全なものであります。然るに此著者の文は極めて壯麗なものであり、希臘語の蘊蓄深きを示し、用語の如きも甚だ豐富であつて、學術語を始め、哲學上の語なども、澤山に使用せられ、此點に於いて新約聖書中他に類を見ないものであります。保羅は好んで我等の主を『キリスト、イエス』と申したものでありますが、布伯來書には此特長ある語は全く無いのであります。保羅の書簡には、猶太人と異邦人と言ふことは無くてならぬものでありますが、本書には異邦人と言ふ語は丸で無いのであります。保羅が舊約聖書を引用する場合には『錄されしが如し』『聖書は何と言へるぞ』『聖書は……言へり』など稱するのが常でありましたが、本書には全然夫れが無く、斯樣な場合には、神自身若しくは聖靈をして言はしめて居るのであります。就中保羅にありての特色は、彼れが福音を人より受けず人に敎へられずと言ふことを極力主張

するにあつたのですが（加一〇十二）此書の著者は自らを『始め主に託て示されたるを聞し者ども』と同一の班において居るのであります。（二〇三）

此如く特別なる點があるのみではなく、其一般の思想から見ても、保羅と此書の著者との間には、種々なる相違があるのであります。卽ち此書に於いては、特に保羅的と見らるべき何等の思想をも、見出すことが出來ぬのであります。此書の著者の見地は全然獨創的でありまして、其中心の題目は、基督の祭司長たることにあるので、此如き事は全く保羅には見ることが出來ないのであります。ですから『信仰』と言ふ同じ語を使ふに當つても、兩者は互ひに異つて居るのであります。保羅にありては、信仰は基督の聖業に信賴することであります。此書の著者にありては、信仰は未來の保證であります。『未だ見ざるものを證憑とする』のであるのです。保羅は好んで律法と福音、肉と靈、奴隷と自主、信仰と行爲と言ふ樣な對照を致したものでありますが、此書に於いては寧ろ**アレキサンドリヤ**の哲學に於

けるが如く、形體と本質、幻影と實在、寫本と原文、模型と眞理と言つた樣な對照を用ゐて居るのであります。略言すれば希伯來書の特色は、著者の保羅たることを全然否定しなければ止まぬものであるのです。

然らば著者は何人であらうかと申しますれば、之れには種々なる揣摩憶說が行はれて居るのであります。W、M、**ラムゼイ**は此書は**パウロ**が**カイザリヤ**の獄中に居る頃、**ピリポ**が書いたもので、彼れは其處から**エルサレム**に居る**ユダヤ**派の**クリスチヤン**に宛てたるもの、夫れは**パウロ**と**カイザリヤ**にある**クリスチヤン**の重立ちたる人々との議論の結果で、時は紀元五十九年の春であつたらうと申して居ります。此說は餘りに明白でありますので、却つて私共をして疑愼の念を持たしむるものであります。**ラムゼイ**がかく斷言しますには相當の根據もあることでありませうけれども、何となく私共をして躊躇せしむるものがあるのであります。**ルウテル**は多分之は**アポロ**の作であらうと申しました。而して此說には相應の信仰

者があるのであります。此**アポロ**に關して使徒行傳十八章廿四節に錄せる『爰にアレキサンデリアに生れし學者にして且つ聖書に達せしユダヤ人』とありまする記事は、希伯來書の著者として如何にもと思はしむるものがあるのであります。**ユダヤ**種族の**アレキサンデリヤ**人で、希臘語の舊約聖書に熟達し、夫れに**アレキサンデリヤ**人一流の解釋法を應用したとすれば、確かに希伯來書の樣なものが出來たであらうとは、私共にも容易に想像さるゝのであります。たゞ怪しむべきは初代の傳說であります。卽ち此著者に關する初代の傳說中、**バルナバ**若くは**ロマのクレメント**に歸せられたるものはありますけれども、之れが**アポロ**の書であるとの說だけは、絕えて唱へたものは無かつたのであります。

他に稍傳奇的な氣分を加味したものでは——重もに**ハルナツク**一派の說でありますが——此書の作者を**プリスキラ**となすのであります。使徒行傳十八章廿六節に依りますると、彼女は**アポロ**をも敎ゆることが出來たとあります。彼女は希來

伯書ぐらひを著述し得るものでありましたが、婦人の著書が聖經の中に加へらるゝと言ふのも妙はであるまいとせらるゝ處から、全く無名にして存する様になつたと申すのであります。併し之れは稍々興味に驅られ過ぎたる說の様でありまして、面白いと申すだけで、何うも取り柄が無い様であります。若し眞に婦人の作であるならば、モー少し其痕跡を示したものがあり相に思はるゝのであります。かの十一章などにも、例へばデボラの如き、モット婦人の代表者を擧げそうなものだと思はるゝのです。夫れで若し私共の想像が許さるゝものならば、數ある著者の中、アポロの如きは最も眞に近きものに考へられるのです。けれども之にも多くの不都合な點があつて、容易に爾うと斷言を許さないのであります。

而已ならず著者が若し保羅でなかつたとすれば、卽ち此書は『希伯來人』に宛てられたものでは無かつたらうと、思はるゝ節があるのであります。蓋し其問題が、或る一定の團體にのみ限らるべき様な種類のものであるのに、夫れに漠然た

る宛名を附する道理はなく、之れは後世此書の內容を推察したる人の、恣まに附したる宛名であつたらうかと察せらるゝのであります。尤も此點に關しても、所說は區々であります。中には此書はロマに在る異邦人たる信徒——多分『家の敎會』の如き小團體に——彼等は此迫害の時代に勢くぢけて元の異敎に歸へり行く危險があつたので——贈つたものであらうと論ずるものもあるのです。併し『ユダヤ敎は基督敎よりは劣つたものだと言ふことを巧みに各方面から論じた』此書簡は、矢張りユダヤ的クリスチヤンのために著作されたものであると見た方が、至當の様に思はれるのであります。若し異敎に歸り行く怖れのために書いたものならば、モット異敎の誤謬や害惡に對する攻擊があるべきだつたと思ふのです。且つ異邦人に基督敎の眞理を知らしめんためのものとしては、かくまで舊約聖書の上に論據を据へたと言ふことは、餘りに不可解な事になるのです。於此乎此書は羅馬に贈られたものであると云ふのが、極めて眞實に近き想像であり

まして、羅馬の**クレメント**が紀元九十五年に書いたものに、此書から引用したものゝあること、亦『イタリヤより來りし者も安を爾曹に問へり』とあるなぞは、皆此想像を有利ならしむるものと言ふことが出來ようと思ひます。

著作の時日に就いては、略ぼ見當が付いて居るものと見てよろしいでせう。夫れは此著者が保羅の羅馬書を知つて居つたらうと言ふとゝ、羅馬の**クレメント**が此書を引用したと言ふ事實でありまして、此期間は紀元六十年から九十年になるのであります、から、何れ其間の事であつたと信ぜらるゝのであります。尤も此書の內容は、此點に就いては總て全く不明瞭であります。卽ち宛てられたる敎會の建設から見れば、モット後世のものと見なければならぬ樣にも思はれるのです。例へば本書十三章七節を見れば既に世を逝つた樣にも見え、彼等自身『時を經ると久しければ人の師となるべき者』であつたと言はれて居り、(五〇十二) 亦彼等は既に迫害を忍び『大なる苦の戰爭』を經たとあります。(十〇卅二) 此書は皆此書

の稍後世のものであるとを示し、恐らくは紀元九十二年から九十六年、**ドミシヤン**の迫害の起る少し前の頃の作かと思はれます。けれども亦一方にありては、此書に紀元七十年の神殿の破壞に就いて何等の事も錄してないのでありますが、若し此書の作が此事件の後のものならば、夫に就いて何をも語らぬと言ふのは、此書の議論の性質から見て、聊か不思議の感はあるのであります。故に此點から見れば、此書は**ネロ**の迫害と**エルサレム**の滅亡(紀元六十五年頃)との間の著作であらうと見るのが、至當であるかの樣に見えます。が、多數の一致する處は、夫れよりは少し遲れて、紀元八十年頃のものであらうとせられて居ります。

希伯來書は書簡ではなく、たゞ書簡の形のみをなしたる、神學的論文であらうと言ふ說も唱へられます。併し之は仔細に此書を讀む人の首肯するを得ないものであるのです。想ふに初は說敎であつたのを(三〇一を注意せられよ)後ち書簡の形となして、回文の用に供したものであらうかと思はれます。何れにしても頗る

獨創的の産物でありまして、基督の人格と使命とに關する思想は、後の基督教の思想に影響する處大なるものであつたのです。私共は保羅と第四福音書記者と、本書の著者とを以て新約聖書の三大神學者と認むる事に躊躇しないものであります。

二

私共は最後に約翰默示錄と稱する、新約聖書の終りにありまする書物に向つて、研究の歩みを進めようと存じます。表題と內容と之れ位ひ違つた書物も珍らしからうと思ひます。私共の普通に理解せる默示と云ふものには、全く似も付かないものであるのです。之れは實は基督教の成立前後の時代、凡そ百年間程に渡りてかの國に頻りに流行したる、所謂未來記文學と稱するものに屬するものであるのです。其未來記文學の代表的なものを、私共は舊約聖書に於いて、但以理書に見出すのであります。つまり宗教的迫害時代の特產物であるのです。迫害に屈

しつゝありし人々が、此特種なる文學に托して積憤を漏したと云ふ事になるのであります。未來記文學の記者に共通なものは、極端にまで風變りな表象を用ゐて——特に數の表象を用ゆるに巧妙でありました——其時代の人物乃至事件に對して、奇異なる想像を以て絕妙なる諷刺をなせる、所謂象徵主義と云ふものを巧みに實行した處にあつたのであります。今日まで私共に傳はりたるもので、純粹にユダヤ的のものでは、エリヤ、バラク、エノクなどのものがあり、基督教の方では、ペテロ、パウロなどに作られたと稱せらるゝものがあります。私共の新約聖書には、玆に私共の研究せんとする、使徒ヨハネのものと言ふのだけが保存せられたのであります——尤も馬太傳廿四章などは『小さき未來記文學』と稱せられて居ります。(可十三〇、路廿一〇參考)一體基督教の時代になつてから、此未來記的の預言と言ふものが、特にバラクレート(聖靈)に依りて教會に與へられた特殊の賜物であるとの思想が、廣く行はれたのでありますから、本來から言へ

ば、使徒時代などには、モット澤山此種の文學が出來て居らなければならなかつたのであります。僅に以上に擧げた位のものであるのは、寧ろ甚だ不思議な事であるのです。

此書に關して**フオン、ソーデン**が『初代基督教文學』の中に次の樣な事を申して居ります。『……永い年代の間にだん〳〵取り擴げられた古い城廓の趾にも比すべきでせうか。塔と塔と幾重さなり、前庭から前庭に續き、破風から破風が出で、通路は上つたり降つたり、出口入口は幾重にも混亂して少しも分らず、此處彼處に珍奇な名畫はあるけれども、差し込む光線の明暗定まらぬがために、時に奇怪、時に陰鬱、時に溫和、時に峻烈、遂ひに其何の樣貌であるかは、何人も判然知るを得ないのである』云々と。今私共は此不可思議なる記錄の內容を、少しく梗概して見やうと思ひます。

『迅速に起るべき事』に關する神の默示であるとの、紹介的序文（一〇一—八）

の後ちに、著者は**パトモス**と云ふ島に在りて、人の子の幻影を見、其見たるものを**アジア**にある七教會に書き贈るべしとの命を受けたと申すのであります。（一九—廿）そして二章一節から三章廿二節に渉りて其手紙を揭げ、四章一節から五章十四節までに、天の事の幻影、造物主と教主との榮光を見たることゝを告げてをります。六章にては七つの封印の六つまでが開かれたることと、そして第七の封印の開かるゝ前に、私共は七章に於いて、救はれたるものゝ印せらるゝこと、其祝福との物語りを讀み、八章に至りて第七の封印は開かれ『天靜謐なりしこと凡そ半時』に及びたりしと記されて居ります。

次ぎの節は新らしき始めをなして居ります。卽ち七つの筩を持つてる七人の天使の事が錄されてあります。（八〇二—十一〇十九）併し十章には他の物語が挿入されて居ります。夫れは他の天使が、小さき卷物に記されし預言を取りて、之れを記者に食ひ盡さしめ、且つ幻に依りて十一章一節から十四節に錄さるゝ『二人

の證者』に關する事が知らしめられたとあるのであります。さて七人の天使が鍼を吹きし時（十一〇十五）**メシヤ**の治世が始まつたとあります。十二章は**メシヤ**の降生と天に於ける戰鬪を物語り、如何に龍卽ち老蛇が、**ミカエル**と彼れの使者によりて天から逐はれ、**メシヤ**の母となりし婦人を迫害したかを物語つてをります。次ぎは十三章に於いて海より出で來りし獸が、龍卽ち**サタン**の權威の下に働きしこと、亦地より出で來りし獸、人をして其數六百六十六なる先きの獸を拜せしめしことを錄さる。十四章に於いて、**シオン**の山に羔が**バビロン**の審判を宣べたる幻、亦更らに人の子が『首に金冕を戴き手に利鎌を持てる』を見たりとあります。十五章十六章は、如何に七人の天使が**バビロン**に對する神の怒りを盛れる七の金椀を地に傾けしかを語り、第五の金椀の時に獸の國暗くなり、第六の時に東方の諸王の爲めに道を備へ、**ハルマゲドン**の最後の戰のために**ユフラテ**の水涸盡きたりとあります。第七の金椀を傾けたる時に、迅雷閃電地震の中に**バビロン**は三つ

に分たれたと錄されます。十七章から十九章十節までに**バビロン**の滅亡、地には悲しみ天には喜びありと言ひ、十九章十一節から廿一節に、**メシヤ**に對して戰をなしたる後ち、如何に獸が捕へられて火の池に投げ入れられしかを語り、廿章に於いて**サタン**は獄に捕へられ、千年の間縛られ、釋され、死と陰府と火の池に投げ入れられ、かくて平和成りたりと言ひ、廿一章一節から廿二章五節に於いて新らしきエルサレム天にある神により下り、廿二章六節から廿一節は結末でありますが、イエスの早く來ますことの信仰と望みを述べ、祝福の辭を以て終つて居ります。

極めて簡短な撮要に過ぎぬのでありますが、此如きは抑も何を意味するものであるのでせうか。殆んど際限の無き、雜多な解釋の出づるのも奇しむに足らぬ事と思ふのであります。奇怪なる想像、異樣なる記號、私共が夫等の眞義を發見すると云ふ事は、眞に容易でないのであります。聖書の何處でも此書ほどいろ／＼にそして勝手に解釋せられて居る處は、餘り無いのであります。例へばかの『獸』

の如きは、或は此王かの王であらうと言はれ、若くは此法王かの法王と申して、古來種々なる王や法王の名が指摘されて居るのであります。亦かの『印誌』は**ルウテル**を指したのだらうと解する人もあれば、或は**ナポレオン**を意味したものであらうと論ずる人もあるのであります。甚だしきは**シミーデル**の言ふ處に據れば、近世**フランス**の探險家**ブラレゲ**をまでも引き合に出した人があるとの事であります。たゞ此單なる一ヶ條に就いてさへ此如くでありますから、其他の事は推して知るべきであるのです。

其一句々々の詳しい事は註解學の範圍に屬する事でありますから、私共は之れを其方に讓りまして、茲には大體の事を申して一般の解釋に參考を供したいと思ふのであります。先づ私共は此書の初めと、そして終りに近く錄さるゝ處に由りて（一〇一、廿二〇六）此書の預言する處は『迅速に起るべき事』に就いてゞあることを注意したいと思ふのであります。此事は基督の口を借りて『われ迅速に來らん』

と四回までも言はしめた事であつて（三〇十一、廿二〇七、十二、廿）著者は基督の再來を俟ち望み、其再來は彼れが存命中にあるべき事であつて、從つて彼れが今此書に述ぶる處は、最近起るべき事に關するものであつて、決して遠き將來のことに關するものでは無かつたのであります。此書を讀み、此書を解するに當りては、私共は此一事を深く心に留めておかなくてはならぬのであります。そして斯くして見ますると、此書の預言の一も、遂ひに應驗さるゝ事なくして終つてしまつたものであると言ふ事を、無論私共は認めておかなくてはならぬのであります。と言つて無論後世の私共の時代に及んで應驗さるべきものとは、此著者も考へては居らなかつたのであります。然らば聊か不都合なものゝ樣にも思ふ感じも致しますけれども、本來此書の目的とする處は其當代の時世を諷刺するにあつたのであることを知らなくてはならぬのであります。ですから此書に錄さるゝことが、必ず後ちになつて應驗さるべきものであると言ふ樣な事は、全く問題外のも

のであるのです。**バビロン**も、獸も、皆其時代のものであつて、決して他のものでは無かつたのです。此書を後ちに應驗すべき預言を書いたものと見て、私共は甚だしく其眞意を誤解するのであります。斯樣に申して尙ほ判然せぬ事は、多く此書にあります。併し判然せぬ事は、何處にも少しはあるのです。

バビロンと言ふのと、聖徒の血と**イエス**の殉教者の血とに醉ひ（十七〇六）七つの山に坐したる婦人（同じ九）とありますのは、かの七丘の帝都にして、**ネロ**の迫害以來基督教徒にとりて、憎惡と恐怖の的となりし羅馬其ものを指したものであることは、殆んど疑ひない處と思ふのです。此都は**ネロ**の沒後、**ガルバ**、**オトー**、**ヴイテリウス**の間に王位の爭奪が始まり、終ひに三分せられたのであります。（十六〇十九）六百六十六の獸とありますのは（十三〇十八）**ネロ**帝を指したものであるのです。六六六を希伯來語に排列しますと『**カイザル、ネロ**』となるのであります。卽ち**ネロ**を表はす記號であつたのです。**ネロ**の如き人を——六百

六十六の獸——**サタン**の代理と考ふることは（十三〇二、四）全く初代**クリスチヤン**の豫想せる處と一致したのでありました。

此解釋の正確であることは、一方史實に徵し、一方聖書の本文に照して證明することの出來るものであります。之れを史實に繹ねまするに、**ネロ**は最後に近づきたる時、或る人の家に逃れ、侍從の官人の助けによりて劒を以て咽喉を刺して終つたのであります。時は紀元の六十八年でありました。然るに**ガルバ**が彼れの死を宣言致しましたけれども、時の人々は夫れを信ぜず、彼れは何處かに隱れ居りて、何時かは再び現はれ來るであらうと言ひ囃されて居つたのです。——我れこそ**ネロ**の再現だと言ふものは其後暫らくは絕えなかつたのであります。此事實が默示錄十三章三節に『我れこの獸の一の首傷を受て幾ど死んとする狀なるを見たり其死んとする狀なりし傷いえければ全世の人これを奇として從へり』とありまする本文と、一致するものであるのです。亦同じ十三章十四節に『刀傷を受て

なほ活る獸』とあり、十七章八節に『昔には有しが今は無し後ち無底坑より上りて』云々とありますのも、矢張り此消息を傳へたものと思ふのです。而して亦十七章十節と十一節とは一見矛盾したもの丶様に見ゆるのでありますが、矢張り右に申した消息に由りて解する事が出來るのであります。即ち七つの王の事を言ひて『昔に在りて今あらざる獸は第八なり即ち七の王より出し』云々とありますのは、**ネロ**は羅馬の七人の王の一人でありますが、再現して第八となるとの意を諷したものであるのです。當時異教の世界では、たゞ**ネロ**は死んだもので無いと信じたのみでありましたが、**ユダヤ**人と**クリスチヤン**の間とには、死んだと言ふことも再現と言ふことも、容易に信ずることが出來たのでありました。

併し茲に少しく困難と見らるゝ一事があるのであります。夫れは即ち獸と獸の像（即ち王と王の像）とを強ひて拜せしめたとあるのですが（十三〇十二、十五）之れは**ネロ**の時代の事には適當しないことであるのです。皇帝禮拜をなした最初

のものは、八十一年から九十六年まで在位した**ドミシヤン**であつたのでした。併し**ドミシヤン**も亦基督教徒を迫害したものであつたのですから、此著者は彼れを以て**ネロ**の復活したものと信じたのであつたのかも知れぬのであります。之れは推測だけでは無く、實際當時の**クリスチヤン**と言ふものは皆**ドミシヤン**を以て、**ネロ**の再來したものと信じて居つたのであります。**ドミシヤン**の迫害は其猛烈なる事に於いて**ネロ**に劣る事なく、當時の**クリスチヤン**は皆**ネロ**と戰ふの勇氣を、以て**ドミシヤン**と戰つたのでありました。即ちかの**イレニウス**が――此人の證言には信をおき難いものもありますが――此默示錄をば**ドミシヤン**の治世の產物だと申して居りますのは、茲に幾分の一致を見る樣にも思はるゝのであります。

然る處此默示錄はモット早き時代の著作であるとの、有力な暗示もあるのであります。即ち十一章一、二節などを見ますると此書の出來る頃には神の宮の外庭や、聖城などが既に敵の手に落ちて居つたが、神の宮夫れ自身は未だ其禍から免

かるゝことが出來るであらうと期待されて居つた樣に見ゆるのであります。して見ると此書は、**エルサレム**の圍みの最中か、或は七十年の陷落の前の頃にか、著作されたるものであらうと信ぜらるゝのであります。

此事に就いて尙ほ少しく述べて見ますると、默示錄は始めから終りまで文體も用語も一つであつて、總て一記者の著作の樣に見ゆるのでありますが、實は一章から八章一節までと、八章二節から廿二章五節までとは、別なものであらうと思はれるのであります。卽ち後者は所謂**ユダヤ**人の未來記文學でありまして、曩きに存したものを、夫れに**ヨハネ**が前者を附け加へ、たゞ原文にあつた**メシヤ**を羔に改むると言ふ樣な、至極僅かな加筆をしたに過ぎなかつたものであらうと信ぜらるゝのであります。更らに深く講究を辿つて見ますると、其**ユダヤ**人の未來記の分は、紀元七十年の五月から八月頃までの間、卽ち**ロマ**の勇將**テトス**が**エルサレム**を圍んで居りまする間に出來たもので、夫れから廿年程過ぎて**ドミシヤン**の治

世の頃に、**ヨハネ**が**パトモス**の島に居つて、基督の再臨を待ちわびつゝ、筆を取つて書き直したものであらうかと思はるゝのであります。

此假定を如何かと思ふ讀者もありませうが、併し事實默示錄の始めの部分と終りの部分とには、判然此區別が存して居ることは極めて明な事であつて、一點の疑ふべきは無いのであります。舊約聖書を引用する場合にも、**ユダヤ**的未來記の方では、希伯來の原文から引いて居りますけれども、**ヨハネ**の方では希臘語の七十人譯から來て居るのであります。そして前者の神としてある處を、後者は審判者**イエス**となして居ります。ヨハネに屬する方の分では、**ユダヤ**人に對してのみ烈しき態度を示して居りますが、**ユダヤ**的の方の分では、異邦人に對して其態度を表はして居るのであります。**ユダヤ**の方では**メシヤ**は共敵を仆して國民を救ふ軍國的神でありますが、**ヨハネ**の方では自身の死に由りて世界を救ふ羔となつて居るのであります。此如く此兩者の相異は顯著なものであつて、注意して讀む人

の容易に看取する事の出來るものであるのです。

而かも亦其ユダヤ的の方の分でも、其性質は全く單一ではなく、夫れに他の起源のものを含んで居るのであります。夫れは此著者自身が呑み盡すことを命ぜられたと言ふ、かの小さき書(十〇八—十一)と言ふものに於いて、事實の消息を示して居ると思ふのです。且つ亦此部分は基督教的のもので無いのみならず、純粹にユダヤ的のものでも無いのであります。亦かの十二章に載せらるゝ、天に於ける戰爭、日を着たる婦人の生んだ男子を窘ませる老蛇に關する奇妙なる物語りの如きも、恐らくは數千年以前のバビロンの神話から來たものであらうと思はれるのであります。此如く種々なる原料から成つて居る此部分が、果して何時頃現在の如く一つに編輯されたものであらうか、固より明白では無いのであります。而かも默示錄なるものは、基督教的のものとユダヤ的及び異教的要素のものとの、奇妙なる化合物である事だけは、最早や疑ふべき餘地は無いのであります。

却說私共は更めて此書の著者の事に及びたいのでありますが、先づ至つて明白な事として、此著者と第四福音書の著者とは同人で無いと言ふ事を前提としてからうと思ふのであります。之れは私共に取つては、實は問題とはならないのであります。文體も用語も、亦其文法も、思想の周圍も、全然異つて居るのであります。第四福音書は至極流暢正確な希臘語でありまして、所謂希伯來式希臘語と言ふ特長の無いもので、亦文法などの誤謬も無いものであります。然るに此書は全く夫れに反して居るものであります。たゞ言語などの相異のみではなく、宗教上の思想がスッカリ異つて居るのであります。神の父なること、亦神の愛なることは、此書には全く無いものであります。亦此書の表はす基督の姿でも、第四福音書の夫れには少しも似て居らないものであります。其世末の觀念にしましても、火の池にありて永久の苦痛を受くるものであると云ふ樣な事は、第四福音書には全く無い構想であるのです。

亦此書は**ゼベダイ**の子**ヨハネ**の作であると言ふことも、私共の想像を許さない處であります。本來此書は**イエス**の使徒の作であるのではなく、たゞ『僕ヨハネ』とあるのみであることを記憶しなくてはならぬのです。而して總て基督に關する記事の工合でも、基督に近く接して居つたものゝ筆であるとは思へないのであります。**ゼベダイ**の子は『我が左右に坐する事は我が予ふべきに非ず』（可十〇四十）と言ふ記憶を有して居つたのでありませうから、此書に有るが如く『我と偕に我が寶座に坐することを許さん』と様に基督を思ふことが出來なかつた筈だと思ふのであります。『默示錄は福音書ではない、而かも親しき友人である』とは、**モフアツト**の言であります。

そこで**パピヤス**の申した此書の著者は長老**ヨハネ**であると言ふ說は、耳を傾くべき理由があると思ふのです。長老**ヨハネ**は**エペソ**の人でありまして、當時の基督教徒の間には可成り聲望のあつたものでありました。彼れは世末の事に關する

預言に興味を有して、廿〇一—六に記さるゝが如き、基督の千年期的支配を信じて居つたとの事であります。夫れにしても此人が果して、二章三章に錄さるゝ様な、西部小亞細亞の七教會に對して權威ある書簡を贈ることが出來たでありませうか。何か其様な關係が存したのでありませうか。假りに或る部分が彼れのものらしく見ゆるにしても、默示錄を全部として見て、果して彼れの著作と言ふことが出來るでありませうか、此等は總て甚だ困難な問題であります。若し亦此書が長老**ヨハネ**のものだとすれば、第四福音書は彼のものでは無いと言ふことになるのであります。何となれば此兩者は、到底互に容れ難きものであるからであります。

著者の何人であつたにせよ、此書が一般の承認を得るまでには、相當の日子を要したのでありました。**ムラトリー**の聖典は、此書を『ペテロの默示錄』と同様に見て居るのであります。三世紀頃の、教養ある**ギリシヤ**の基督信者の間には、此書に對する强烈なる反抗心が抱かれてあつたのです。其言語思想共に、甚だし

く希伯來臭味の多きを厭うてゞありました。四世紀頃の**ユウセビヤス**は、之れを使徒の作と認むることが出來なかつたのでした。長い世紀の間、或る人々は其餘りに唯物的なるのに躓いたのであります。亦或る人々は、其奇異なる象徴を厭ふたのでありました。然るにも拘はらず、遂ひに聖書の中に加へらるゝに至つたのでありますが、して見れば之れに何か聖書に加へられるだけのものがあるものと見えるのです。勿論『勝を得る者』に與へらるゝ光榮ある約束、『聖徒の勇氣と信仰』とを稱揚せる處は、多くの敬虔なる信徒の心を慰めたものであるとは、疑ひないのであります。其他處々に鏤ばめられたる幾多の寶石は、此書を以て世界大の文學の一たらしむる價値は充分あるのでありませう。**バビロン**の運命を歌へる挽歌の如何に印象的なるよ。

爾の中に琴をひき樂を奏し笛をふき鉦を鳴らす聲重ねて聞えず各樣の工人重ねて見えず磨の音重ねて聞えず燈火の光りかさねて輝ず新郎新婦の聲かさねて

聞えざるべし蓋はなんぢの中の商人は地の尊貴者なれば也また萬國の民なんぢの魔術に惑はされたれば也

亦新らしきエルサレムに就いて錄す處、其燃ゆるが如き想像の如何に雄大ではありますまいか。

十二の門は十二の眞珠なり一の眞珠にて一の門を造れり城の衢は澄澈る玻璃の如き純金なり、われ城の中に殿あるを見ず蓋は主たる全能の神および羔その殿なれば也

亦最後の幻影に托して著者の感情を抒べたる一節の如きは、蓋し如何なる詩人の錦心麗腸の句も遠く及ばぬものであらうと思はれるのです。かゝる文章は、之れを媒介する國語と言ふものゝ不便にも打勝つて、直ちに何人の胸底にも共鳴することの出來るものだと思ふのです。

天使生命の水の河を我に示せり其水澄澈りて水晶の如し神と羔の寶座より出づ

城の衢の中および河の左右に生命の樹あり十二種の果を結び一種を月ごとに結ぶ也、其樹の葉は萬國の民を醫すべし重ねて呪詛あることなし神と羔の寶座そこに在りその僕これに事へん僕ども神の面をみ神の名かれらの額に在るべし彼處には夜あることなく燈の光と日の光りとを用ることなし蓋は主なる神かれらを照し給へば也かれらは世々窮りなく王たらん。

ア、默示錄！　私共は之に對して多くの惑ひを懷いて居るものであります。而かも之れに對して、今尙ほ多くの崇敬の情を禁ずるとの出來ぬものであります。今日私共が之れを不意に、或る古き僧院かなぞの古き記錄の堆積の中から發見したとならば、如何に私共の心は尊とき古典の香りにおどる事でありませう。げに默示錄に、永刼の香り薫じつゝあるのであります。

私共は既に私共の研究を終らんとするのであります。此研究の旅行を私共と共

に續けられたる讀者諸君は、私共の旅路の餘りに簡短で、亦餘りに駈足であつたに拘はらず、顧りみて得る處の必ずしも尠なからざりしに氣付かるゝ事であらうと信じて居ります。私共は此旅行に於いて、永い世紀を通じて、神の完全なる啓示者、神の子にまで達せんとして、種々なる文明と種々なる宗敎との境を經たのでありました。私共は神話と、歷史と、哲學と、詩と、預言と、格言と、書簡と、敎理と、幻影との間を通過して、遂ひに其種族の達せんと欲したる、宗敎の永久の眞理に達したのでありました。批評の浪に洗れて、尙ほ殘る尊ときものを發見いたしたのであります。――此等の記錄は、人間の宗敎的本能の驚くべき記念碑として、永刼に私共の手に存することであります。

批評は聖書に對して何を爲し得たかとは、私共の屢々質問せらるゝ處であります。併し此如き質問の起ると云ふものは、必竟批評と云ふものに對する世人の誤解でありまして、私共は私共の讀者の心の中より除き去られんことを熱心に希望

致すものであるのです。批評は聖書に對して何をもなし得るものでは無いのです。之れを何かなし得るもの丶樣に考へて恐れますのは、全く謂はれの無い事であるのです。私共を『救に導く』聖書の永久の能力は、著者の事や、著述の時日や、或は其文學的研究の結果などに由りて、影響を受くるものではないのです。本當の寶物は、私共が夫れを盛れる器物の『土器』であることを見出した時にも變りのあるものでは無いのであります。私共は種々なる探究をなしまして後ち『神の言は活きてかつ能あり兩刃の劍よりも利く氣と魂また筋節骨髓まで刺し剖ち心の念と志意を鑒察るもの』であるとを、いよ〳〵堅信するにいたるのであります。私共は之れをなし得て、非常なる滿足を以て神を見上ぐるのであります。そして私共の手には『生命の生命』に至る『書の書』が、いつまでも殘るのを感謝致すのであります。

聖書の話畢

大正六年七月十五日印刷
大正六年七月廿五日發行

定價一圓二十錢
（本店の出版物は凡て定價にて販賣仕候）

著者　宮川巳作
東京市神田區南神保町十六番地

版權所有　岩波茂雄

發行者　中田福三郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者　寺島藤次郎
東京市日本橋區本銀町二丁目九番地

製本者　秀英舍第一工場

發行所　岩波書店
東京市神田區南神保町十六番地
電話本局五四二〇番
振替東京二六二四〇番

法學士 藤井武著

新刊

新生

定價五十五錢
送料八錢

目次

來りて見よ—イエスの二大慰藉——イエスの神性—共働者イエス—教理と信仰
新生と希望—子たる者の自由—活ける水—來世の希望—一粒の麥
戰鬪と勝利—蛇の如く智く鴿の如く單純—孤獨の勝利—基督信者の境遇—誘惑
歡喜と感謝—十字架を負ふの歡び—心の貧しき者は福なり—感恩の殘生

帝大法科出身の俊秀、其多くは名利を求めて飽くなく榮達を希ふて止まざるに我藤井氏獨り穎脫有爲の資を以て官に就き治績大に上り望を將來に囑せらるゝの時一朝深く感する所あり斷然官職を拋ち周圍一切の事情を排して聖書の研究と福音の宣傳とに其全生涯を捧げられんとす。凜乎たる氏の決心。徹底せる氏の態度。純乎として飽くまでも純なる氏が心境。思ふに當代稀覯の事に屬す。本書は氏が身に餘る思寵を獨り專らにするに忍びずして公にせしもの眇たる一小冊子に過ぎざるも氏が新生の光景の一班を知るに足れり。現代の宗教家教育家を始め道を求め修養に志す者は氏が心根の一端に觸れて正に深く反省する所あるべし。

發行所 東京南神田町 岩波書店 電話本局四五二六 振替東京二四二〇番

トマス・リンゼー著
法學士 藤井武譯

ルーテルの生涯及事業

(四六判四百頁 定價一圓參拾錢)

內地郵稅八錢
臺灣、樺太、支那
朝鮮共郵稅十二錢

目次

第一章ルーテルの幼年時代及其教育 第二章準備時代 第三章赦罪爭論 第四章三大宗教改革論文 第五章ウオルムスの議會 第六章ワルトブルヒ城 第七章宗教改革の進行 第八章政治的及び社會的判亂 第九章結婚家庭生活及び公的生活 第十章福音主義教會の創設 第十一章ルーテルの晩年

其昔ガリラヤの湖邊に傳はりし喜びの音信はいとも單純なるものであつた、使徒パウロは之を「信仰に由て義とせらる」の數語に要約した然るに僞キリストなる羅馬法王はいみじき福音を化石せしめんとした、人は再び舊の暗黑に彷徨うた其時一人の青年の心に聖靈が宿つた、嘗てパウロを雀躍せしめたる同じ福音が今彼を朴舞せしめた、聖靈の力は絕大であつた、波紋は彼の胸より次第に大なる圓を描いて進んだ、獨逸と法王廷と全歐洲とが動かされた、偉大なる宗教改革は遂に實現した、イエスの單純なる福音は再び旭日の如く人心を照した、之れ四百年前の出來事である、今や基督教の信仰又も化石せんとする時に當りルーテルの生涯と事業とは正に新しき暗示を與ふるものである。

發行所 東京南神田町 岩波書店 電話本局四五二六 振替東京二四二〇番

ハインリチ原著　石原謙
山谷省吾共譯

新刊

原始基督教

四六判三二〇頁
定價一圓
內地支那朝鮮
滿洲樺太臺灣
共郵稅八錢

目次

第一章―イエスの事業（福音）……十三編
第二章―エルサレムの原始教會、猶太人基督教並びに初期の傳道　十三編
第三章―異邦人基督教と使徒パウロ　十七編
第四章―使徒時代第二期に於ける基督教……廿七編
……原始基督教時代年表……譯者註、

基督教の本源としての原始基督教を叙せる者少からずされど其の眞髓を捉へて然も批評的歷史的態度を失はず簡明に然も包括的に諸問題を論究せる通俗的著作は稀なり。此書現代有數の新約聖書史家にして又當時の文化史に通曉せる老大家が多年の蘊蓄を傾けて教養ある一般讀者の爲めに成せるもの、基督教と其發達とを理解せんとする者は此書に於て充分なる目的を達するを得む。

發行所　東京南神保町　岩波書店　振替東京五六四二〇番　電話本局二四〇〇番

哲學叢書刊行に就いて

オイケン、ベルグソン、タゴール。我が思想界の送迎も亦實に多事を極む。これ等の流行は固より喜ぶべく視すべしと雖も、唯だこれをして我が思想界に實實なる意義あらしめんが爲めには、先づこれを受くる地盤を養はざるべからず。近來叢書類出版の盛行はまさに此時代的要求に應ずる擧たるを疑はずといへどもその從來世に出づる者は、不幸にして概ね一夜漬の片々たる小册子か或は羊頭を掲げて狗肉を賣る者、比々として行に迎合して、却て根本的理解の道を杜絶するの弊なしとせず。不肖微力を以てして幸に尊敬する諸先生の庇護と少壯有爲の學者の努力とに須ちてこゝにこの叢書の刊行を企つる者、實にこの缺陷を補して時代の眞摯なる要求に應じ、我國文化の進歩に寸尺を貢獻せんとするの微衷に出づ。即ち先づ第一着として唸々哲學の諸部門に亘りて最近の知識を最も根本的に最も簡約に、而も亦最も平明に叙說し、廣く江湖思想界のことに興味を有する人の座右に薦め、以て庶幾は堅實にして精確なる知識の基礎を供せんと欲す。而して執筆の著者は皆新進氣鋭の學者にして、最も敏感にして熾烈なる學者的良心を有する士、虛名未だ廣く世上に知られざるも、實力は斷じて所謂大家に劣るものにあらず、而かも不肖が一片の志を諒として、最上の努力を傾倒せられんとす。從來の杜撰なる紹介と根抵なき獨創との紛々たるに倦みて、精嚴透徹の知識を提供するの書に飢うる士、若し本叢書十二册を熟讀玩味すれば、世界に於ける最新最高の思潮に參するを得るのみならず、更に一歩を進めて自已の生活と思想とを形成するに當りて裨益するところし蓋鮮小にあらざらん。世間の學者と出版書肆と相共に虛僞を恥とせざるが中に立つて、著者と書肆との眞實の努力になれるこの企畫を天下の前に告ぐるは不肖のひそかに光榮とするところなり。世上の君子願くば不肖が一片の志を諒としてこの微擧を遂げしめよ。

大正四年十月

岩波書店主
岩波茂雄

21178

顧問
文學博士 波多野精一
文學博士 西田幾多郎
文學博士 朝永三十郎
文學博士 大塚保治
文學博士 桑木嚴翼
文學博士 三宅雄二郎

編輯者
文學士 上野直昭
文學士 阿部次郎
文學士 安倍能成

哲學叢書 完成（全十二册）

文學士 紀平正美 (1) 認識論（第六版）
文學士 田邊元 (2) 最近の自然科學（第五版）
文學士 宮本和吉 (3) 哲學概論（第六版）
文學士 速水滉 (4) 論理學（第六版）
文學士 安倍能成 (5) 西洋中世哲學史（第三版）
文學士 阿部次郎 (6) 倫理學の根本問題（第六版）
文學士 石原謙 (7) 宗教哲學（第三版）
文學士 上野直昭 (8) 精神科學の基本問題（第三版）
文學士 阿部次郎 (9) 美學（第四版）
文學士 安倍能成 (10) 西洋近世哲學史（第三版）
文學士 高橋穣 (11) 心理學（新刊）
文學士 高橋里美 (12) 現代の哲學（新刊）

□營業科目—圖書出版—聖書販賣—新刊圖書雜誌販賣—古本正札販賣—古本買入

○地方販賣部—新本古本とも通信販賣による從來の弊風を一掃し誠實懇切を旨とし何れの地方たるを問はず最も敏速に出來得る限り安價に安心して御取引の出來る店たらんことを何よりも第一に熱望いたし居り候、御送本も安全にして便利なる振替を御利用被下度候（振替口座東京二六二四〇番）

○市內販賣部—舊來の弊風を斥け正札販賣を敢行仕り候御注文に對しては出來得る限り安價に且つ迅速に御屆可致候

○圖書出版部—學界若くは文壇を問はず現代又は後世を論ぜず必ず文化に價値ありと確信する最良の圖書のみを嚴重に撰擇して出版可致候

大正六年七月

東京神田南神保町 岩波書店 振替東京二六二四〇番 電話本郷 五四二〇番

終